

内容紹介

山口県上関町の祝島の農家や漁師、商店主らは1982年に中国電力上関原発の建設計画を知ってから32年間、実力行使で対岸の埋め立て工事に抵抗してきた。主力部隊は、島で唯一の女性漁師を中心にしたおばちゃんたちだ。安全神話を疑い、原発マネーには頼らない。島の生活を守るため、絶滅危惧種も生息する瀬戸内の美しい恵みの海や山を放射能で汚すわけにはいかない——。「真の豊かさ」とは何か、「環境を守る」とはどういうことか、島民らの一途な自立志向と不屈の行動を通して問いかける。

初出

朝日新聞 二〇一四年九月五日～二十五日

※本文内の画像は、WEB用のものを転用しているため、解像度が低い場合がありますが、ご了承ください。

| | |
|------|------------|
| 第1章 | 1200回目のデモ |
| 第2章 | おばちゃん部隊出勤 |
| 第3章 | ひきょうじゃないか |
| 第4章 | 亡き夫継ぎ磯漁師に |
| 第5章 | 楽しくするんが役割 |
| 第6章 | あの人がいった通り |
| 第7章 | 差別の構図が見えた |
| 第8章 | 「校長を辞める」決意 |
| 第9章 | 1人だけの散歩デモ |
| 第10章 | 農家で食べていける |
| 第11章 | 3倍高値でブタ卸す |
| 第12章 | 責任があるんです |
| 第13章 | スカートは、はくな |
| 第14章 | 昔は自民支持だった |
| 第15章 | Tシャツで延長申請 |
| 第16章 | 知事に「うそつき！」 |
| 第17章 | 学会が異例の異議 |
| 第18章 | 町民の反応変化した |
| 第19章 | 海は絶対に売らない |
| 第20章 | 反原発、はってでも |

第1章 1200回目のデモ

2014年9月1日、瀬戸内海に浮かぶ山口県上関（かみのせき）町の祝島（いわいしま）で、毎週月曜恒例の原発反対デモがあった。

午後6時半、「原発絶対反対」の鉢巻きをした島民ら約50人が港近くの広場に集まる。デモは1982年に中国電力の上関原発計画が浮上して以来続けられ、この日で1200回となった。

原発計画地の田ノ浦湾は、祝島の対岸にある。距離は約4キロ。肉眼でも見える。

デモに参加するのは農家や漁師、商店主ら島民だ。若い移住者もいる。列の中ほどに、おばちゃんたちが陣取る。

「原発反対、えいえいおー！」

「きれいな海を守ろう！」

デモはゆったりと進む。

列の中に竹林民子（たけばやしたみこ）（71）がいた。島でただ1人の女性漁師で、32年、ずっと反対運動を続けてきた。

「おお、お久しぶり」

竹林は、デモについてくる制服警官に右手を挙げて声をかけた。警官も「お久しぶり」。警官の1人は島の駐在所勤務、ほかの2人は本土の柳井署から船に乗ってくる。

竹林は痛む左足を引きずりながらゆっくり歩く。数年前、乗っていたバイクの車輪に巻き込まれ、けがをした後遺症だ。

デモは道幅1・5メートルほどの住宅地の路地を縫うように歩く。シュプレヒコールをあげては、その合間に世間話。隣のおばちゃんと「あんた、体調どうかね」。

島民は32年前、原発建設計画を報道で知った。怒った島のおばちゃんたちが自然と集まり「原発反対！」と叫びながら歩き始めた。見ていた警官が「これはデモだ」と許可をとるよう求めた。それが始まりだ。

当時は島の集落をくまなく歩き、約2時間かかった。女性だけと島民全体の計2回あった。今は週1回だけで30分程度で終わる。

上関原発は田ノ浦湾の約14万平方メートルを埋め立て、原子炉2基を設置する計画だ。中国電は09年10月に埋め立て工事を始めたが、東日本大震災直後から中断している。

32年の間、島民たちは座り込みや工事船の進入阻止など抗議行動を続け、計画を遅らせてきた。

「ゆったり闘うんよ。気持ちを張ったままじゃ、30年も続かん」

闘いの山場は震災の約3週間前。11年2月21日だった。

第2章 おばちゃん部隊出動

2011年2月21日未明、山口県の上関原発計画地で中国電力の埋め立て準備工事が始まった。

瀬戸内海にある祝島で反対運動を続ける約100人が、前日から作業阻止の態勢を取っていた。漁師の竹林民子（71）もその中にいた。

「中国電力が21日から大量動員をかける」。当時、「上関原発を建てさせない祝島島民の会」事務局長だった清水敏保（しみずとしやす）（59）はそんな匿名のはがきを受け取っていた。内部告発だったのかもしれない。

だが中国電はこれまで、作業をするのは主に日の出から日没までだった。清水らは、まさか未明から動くことは無いと思っていた。

異変に最初に気づいたのは、和歌山県から反対運動の応援に来たミュージシャン高橋伸明（たかはしのぶあき）（43）だった。午前1時ごろと記憶している。

祝島対岸の田ノ浦地区に向かう幅2メートルほどの町道に車をとめて寝ていると、警察官がドアをたたき「車をどかせ！」と迫ってきた。

警官の後方にはバスなど何台もの車のヘッドライトが見えた。

「中電が来てます！」。携帯電話で島に連絡した。車を動かし始めたが、島民らの到着まで時間を稼ごうと時速5キロほどで進んだ。

午前2時ごろ、業を煮やした中国電側はバスを降り、数百人の警備員、作業員が計画地へ歩き始めた。

中国電側は埋め立て計画地に着くと、海岸に進入阻止の柵を建て始めた。警備員が作業員を囲んでガードし、その中で作業員が浜に杭を打ち込んで柵を作ろうとした。

清水は船で計画地と祝島を往復し、島民らをピストン輸送した。約100人が田ノ浦に着いた。

竹林は、弁当や水筒、炊事用の水ボトルを詰めたリュックを背負い、一番前に出て警備員と向き合った。

ウインドブレーカーに足は長靴というスタイル。60～70代が中心の「おばちゃん部隊」だ。警備員に体をぶつけないがにらみ合う。

警備員はスクラムを組んだ。おばちゃん部隊は口々に抗議するが、警備員は動かない。

竹林は一計を案じた。にらみ合いから抜け出し、わきの石垣に上って警備員の後ろに出る。石垣の高さは約2メートル。そこにあった竹棒を石垣に立てかけ、伝って浜におりた。

もう目の前は作業員。杭に手をかぶせた。作業員は苦笑いして杭を打つ手を止めた。工事はほとんど進まなかった。

第3章 ひきょうじゃないか

2011年2月21日夕、中国電力の社員らは上関原発計画地で抗議行動を続ける島民らに「重要なお知らせ」と書かれたビラを配り始めた。

「田ノ浦海岸への立ち入りは、裁判所から命令が下されている不法行為です」

この日、山口地裁の飯田恭示（いいたきょうじ）裁判長は、「上関原発を建てさせない祝島島民の会」事務局長だった清水敏保（59）ら12人に工事の妨害を禁じる仮処分を認める決定を出した。

中国電力は、この年の2月1日付で当時の山下隆（やましたたかし）社長（現会長）が上関原子力立地プロジェクト長を兼ねる人事を発表。現地の準備事務所の要員を10人増やし、一気に工事を進める姿勢を明らかにしていた。山口県から取得した埋め立て免許では、完工期限が12年10月となっている。

翌2月2日も、竹林民子（71）らおばちゃん部隊は田ノ浦へ向かった。

「誰が何と言おうとずっと反対じゃ。お父さんが一生懸命守ってきた海。埋め立てするなら一緒に埋めてもらってもえんじゃ」

海岸で進入阻止用の柵を設置しようとする作業員らの前に立ちふさがった。

民子と幼なじみの元上関町職員、藤本芳子（ふじもとよしこ）（73）も浜に座り込み、警備員と向き合った。警備員はヘルメットを深くかぶり、うつむきがちで目を合わせなかった。無言でにらみつける男も多いが、なかにはアルバイトに見える若者もいた。

「あんた、うちの息子に似ているわね」と声をかけてから「ちょっとそこ通してくれん？」。

「私ら30年もこんなことやってるんよ。自分のおばあちゃんが同じことしてたらどう思う？」

すると、警備員の一人がいった。「柵を作ると聞いただけで、こんな現場とは知らずに来たんです」

工事3日目の2月23日、午後4時ごろ作業員に休憩の声がかかり、現場を離れた。おばちゃん部隊も態勢をゆるめ、浜辺で休んだ。すると急に警備員たちが走って集まり、腕を組み始めた。フェイントだ。

島民は「ひきょうじゃないか」と詰め寄った。警備員の腕をふりほどこうともみ合う間に、おばちゃんたちは、はって入りこもうとした。

腕を組み合っていた警備員が後ろに倒れ、おばちゃんら2人が下敷きになってけがをした。救急車が呼ばれた。

翌日から強行策が変更され、作業態勢は縮小した。

第4章 亡き夫継ぎ磯漁師に

山口県上関町・祝島の漁師、竹林民子（71）は10人兄妹の末っ子として生まれた。

父は瀬戸内海の一本釣り漁師で、母は畑をしていた。

島の中学を出て倉敷の縫製工場に就職。神戸の部品工場に移る。26歳で島に戻り、8歳上の漁師、竹林磨之助（まのすけ）と結婚した。磨之助も一本釣り漁師だった。

2人の息子に恵まれる。2人はそれぞれ島を出て就職した。

夫の磨之助は口数は少ないが、人をまとめる力があつたという。

民子の幼なじみの藤本芳子（73）は「民ちゃんのことをいつもにこにこ受け入れていました」という。

磨之助の周りには人柄を慕うグループができ、島民は彼らを「竹林連中」と呼んだ。磨之助は歌がうまく、北島三郎をよく歌った。

原発計画が浮上した1982年、民子は2人の息子の子育て真っ最中だった。磨之助は反対の立場を明確にし、民子も反対運動に加わった。

磨之助は14年前、65歳で肺がんで死去。民子があとをつぎ、島でただ一人の女性漁師になった。

船はあるが、使うのは月に2～3日。冬から春にかけてはヒジキ、夏はウニやサザエを磯でとる。ヒジキは釜で炊き、天日干しや袋分けの作業は島民が手伝ってくれる。

2014年7月10日、ウニ漁が解禁になった。台風8号の波がおさまった翌11日、民子は島西部の三浦海岸にバイクで向かった。

午後3時前の干潮に合わせ、磯に下りる。ジーンズに白い長靴、ウインドブレーカー、ほおかむり姿。

海岸にいたおばちゃん仲間が記者を見て、「これは誰かね」。

「海で拾ったの。わしゃ若いのが落ちてるとすぐ拾うんよ」

おばちゃんたちは「ええとこに拾われたねえ」と笑う。民子の面倒見の良さは評判なのだ。

「ようら、どっこい」

「うーら、それっ」

ひざの高さほどの石を裏返した。

「こういう石の下の際間におるんじゃ」

バフンウニやサザエを次々に拾い上げ、1時間ほどで、かごがいっぱいになった。

自宅に戻ってウニの身を出す。芳子が手伝いに来てくれた。ひとつひとつ割って開き、中身を出す。海水で洗ったあと不純物を取り除き、アルコールで瓶詰めにする。全部が終わる頃には日付が変わろうとしていた。

第5章 楽しくするんが役割

2010年4月、上関町立祝島小校長に赴任した山本英二（やまもとえいじ）（55）は、祝島の漁師、竹林民子（71）を見て「月光仮面のようなだ」と思った。

白いバイクでさっそうと走り回っているからだ。

民子の一日は、午前5時ごろ起きて、朝一番の定期船で着く新聞の配達を手伝うことから始まる。

バイクはヤマハの50cc。「荷物をのせやすい」と、荷台は長さと幅が約50センチもある。

前かごには二つの竹筒がくくりつけられている。筒の中には、山で使うマムシよけの棒と、海でアワビなどをとる際に使う棒が入っている。

歩いている人を見ると、すぐ声をかける。

「おい、どこ行くんか」

「足の調子はどうか」

島を縦横に走り回っては声をかけ、世話を焼く。

島は周囲12・7キロで、集落は東部に集中している。だがバイクの走行距離は約4年で3万キロを超えた。

民子のムードメーカーぶりは島内でも評判だ。

原発反対の座り込みを続ける場で磯節を歌って踊る。鍋や釜を持ってきて焼きそばを作り、遠方から応援に来た若者らに振る舞う。

警察官に握り飯を振る舞ったこともある。「相手も人間、腹は減る」

食べんさい、とラップにくるんだ握り飯を私服警官たちの前に置いた。警官はだれも手を出さない。

しかし、しばらくして行ったら全部なくなっていた。

2009年には「立入禁止」と書かれた中国電力の作業区域内に、警備員が警戒する中、ひとり中腰で入っていつてしまった。

「立ち入りはダメじゃけど、座りながらならええんじやろ」

これはしばらくのあいだ島民たちの笑い話のネタになった。

緊迫したにらみ合いが続く中、どうして笑えるのか。

「びんと張ったヒモは切れやすい。冗談言って楽しくするんがわしの役割なんよ」

弁が立つ漁師の妻、寡黙だが粘り強い商店主、そして民子のような世話好きのムードメーカー……。

「誰がどんな性格か、島のもんは互いにわかつちよる。最初から役割分担が決まっとる」と民子は言う。

闘いが怖くないのか。

「人を殺しに行くんじゃない。ただ島の生活を守るために頑張るんじゃけ、なあんも怖いことはない」

第6章 あの人がいった通り

2011年2月の上関原発埋め立て工事の再開阻止から3週間後、福島第一原発で事故が起きた。

祝島の漁師、竹林民子（71）はテレビを見て思った。

「あの人がいった通りじゃ。もし生きとつたら、それみたことかと言うじゃろうねえ」

「あの人」とは、科学者の故・高木（たかぎ）仁三郎（じんざぶろう）。原発計画が浮上した頃、高木は祝島に講演に訪れ、「必ず原発事故は起きる」と訴えていた。

中国電力は2009年9月、島民たちが漁船に乗って海上で抗議行動をしていると、拡声機でいった。その言葉を民子は覚えている。

「皆さんが心配しているような、海が壊れるということは、絶対にありません。絶対といってもいいほど、壊れません」

だが福島第一原発は爆発し、海には汚染水が流れていた。

上関町長の柏原重海（かしわばらしげみ）（65）は原発事故を受け、中国電力に「慎重な対応」を要請した。同社は11年3月15日、工事の中断を発表した。

「わしがいった通りになってしまった」という人が、ほかにもいる。むかし福島第一原発に出稼ぎに行っていた磯部一男（いそべいちお）（91）だ。

「東電福島第一2号機」

磯部の放射線管理手帳にはそう記されている。78年12月23日～79年2月28日、福島第一原発の2号機で働いたとの記載。被曝（ひばく）した線量は「850ミリレム（8・5ミリシーベルト）」とある。

磯部は半農半漁の家に生まれ、昭和20～30年代には山口県宇部市の炭鉱で働いた。島に帰ってミカン畑を営んだが、それだけでは食えない。出稼ぎで妻と娘2人を養った。

山口県岩国市のプラント修理会社に勤めに出た頃、社長から「原発に行ってくれんか」といわれた。78年当時で日当は9千円。飛びついて福島第一原発に同僚らと向かった。

紙製とビニール製の防護服を2枚重ね着し、2号機に入った。ポケット線量計を携帯し、ポンプの傷の改修などをしたが、5～30分でアラームが鳴った。退出する際は肌着を検出器にかけ、反応すると係員に裸になるよう命じられた。

石油プラントの改修では作業時間はもっと長く、日当は安い。なぜ原発は短時間で高給なのか。危険だからではないのか。疑問が膨らんだ。

82年に上関原発計画が持ち上がると、反対運動に加わった。島内には、磯部のように出稼ぎで原発で働いた人が十数人いた。

第7章 差別の構図が見えた

中国電力が上関原発の埋め立て工事を再開した2011年2月21日。上関町立祝島小の校長、山本英二（55）は気が気でなく、理科室から望遠鏡を持ち出して警備員と島民のもみ合いを見つめていた。

祝島小は島の高台に位置し、対岸約4キロの田ノ浦の原発計画地がよく見える。

騒ぎを見ながら児童の1人が「うちのばあちゃんも、きょうは田ノ浦に行っている」といった。山本は、ただ傍観している自分にもどかしさを覚えていた。

10年4月に赴任するまで、山本にとって上関原発計画は「対岸の火事」だった。

約25年前、鹿島町（現・松江市）の中国電力島根原発を教職員団体の研修で視察したことがある。

発電所内を見学し、担当者から「異常が起きても二重、三重に閉じ込められているから大丈夫です」と説明を受けた。「原発は科学技術の最先端の姿だ」と感心した。

その晩はホテルに泊まり、夜はカニをつまみに酒を飲んだが、費用を払った覚えはない。

原発計画地の田ノ浦は上関町の南西端・長島の突端にある。町中心部からは山に隠れて見えない。だが、対岸の祝島からは東の真向かいだ。

原発ができれば、島の人たちは目の前の原子炉建屋から昇る朝日を毎日拝むことになる。子どもたちが毎日を通る教室からも見える。それほど近くに原発ができる。

山本は島で暮らすようになって初めて、原発を身近な問題として考えるようになった。

これは、電力消費地の都市部から辺境に対する蔑視ではないか。都市部の大多数がよければ、辺境の少数は危険でもいいのか。これは祝島を標的にした差別ではないのか。

山本は島民と付き合ううち、原発問題に差別の構図があると感じるようになった。教師になって以来、子どもたちに「許すな」と教えてきたことだった。

祝島に赴任後、教員住宅にいても月曜デモの声が聞こえた。お年寄りたちが列の中心にいた。

「人々は、差別はおかしいと訴えているだけなんじゃないか」

学校の発表会で、山本は漁師の竹林民子（71）とドジョウすくいを踊った。そのとき、民子が「校長、これしていいか」と「原発絶対反対」の鉢巻きを持ってきた。「だめ！」と笑ったが、反原発と島の暮らしは一体だと感じた。

第8章 「校長を辞める」決意

2011年3月の福島原発事故後の5月、上関町立祝島小校長の山本英二（55）は、毎月の学校だよりにこう書いた。

〈福島原子力発電所事故は、私に大きな課題を突きつけました。（中略）原子力発電所について知らないこと、いや知らされていなかったことが、あまりにも多すぎました〉

祝島に来てから抱き始めた原発への疑問が、東日本大震災を経て憤りに変わった。

単身赴任の教員住宅では、島民が作った京都大原子炉実験所助教、小出裕章（こいでひろあき）の講演録を読みふけた。週末に山口県下松（くだまつ）市の自宅に帰っても、ネットで原発について調べた。

「文部科学省も原子力ムラに加担してきたのではないか。安全神話を子どもたちに教えてきたことを反省すべきではないか」――

11年5月13日、山本は山口市内であった県小学校長会の研修会に出席した。壇上に立った県教委幹部があいさつを始めたが、震災や原発事故には一切触れず、生徒指導や学力向上について述べた。

あいさつが終わったとき、山本は右手を挙げて立ち上がった。発言に備え、壇上から見えやすい中央からやや前寄りの席に座っていた。

「祝島小の山本です。県教委に、お願いがあります」

校長会ではふつう、県教委に要望をぶつける校長などいない。県教委幹部は「えっ、何ですか」と戸惑った様子を見せた。

「原子力・エネルギー教育について、今後のあり方など県教委のご見解をお聞きたい」

山本は、教委幹部の返事はこんな内容だったと記憶している。「地域の課題は、地域で解決するように」

閉会后、他の校長から「大変なことをいったな」といわれた。「なぜあんな場でいったのか」とたしなめられもした。

その5日後、県小学校長会の会長ら幹部に呼び出される。「県教委に失礼な物言いをし、校長会は顔に泥を塗られた」と叱責（しっせき）された。

山本は非礼を認めたうえで、上関町の地図を示していった。

「ここに原発を建てるのは理不尽ではありませんか」

だが校長会長は「そんな話を聴くために来てもらったんじゃない」と声を荒らげ、延々と説教が続いた。

教育界を率いる者が、あの震災後も原発問題に何の疑問も持っていないなんて――。山本は帰りの車中で辞職を決意した。

第9章 1人だけの散歩デモ

上関町立祝島小校長の山本英二（55）は、2011年10月末に辞職した。

翌12年夏、山本はたった一人で「散歩デモ」を始めた。

自宅は山口県東部の下松市にあり、ベランダからは祝島が見える。A4の紙にパソコンで「NO NUKES」「脱原発」と印刷してクリアファイルで覆い、白いビニールひもで体の前後にくくりつけた。

自宅を出発して、中国電力の火力発電所や市役所、原発にも携わる大手家電メーカーの工場などを約2時間かけて毎朝歩いた。

その年の8月ごろからは、上関町の中国電力上関原発準備事務所前に立った。自宅の押し入れにあったスノコを立て看板にし、「脱！原子カムラ」「中電さんサヨナラ」と印刷した紙を張った。社員や町民が出入りする際には、スノコを前に押し出した。

東京では毎週金曜日、首相官邸前で反原発デモが行われていた。それに合わせて続けた。

「一緒に歩いて良いですか」。山本は内心、そんな反応があるのではないかと期待していた。だが祝島から約25キロ離れた地元では、何の反応もなかった。周囲の人は誰も振り向かず、距離を置いて歩く。

妻の久子（ひさこ）（66）は山本が一人でデモを続けるところを車で通りかかったことがある。「英二さーん」と声をかけたが、かわいそうでならなかった。

11年10月に退職したころ70キロ近かった体重は、12年12月には53キロまで減っていた。

山本は14年4月2日、約2年半ぶりに祝島を訪ねた。

P T A会長、蛭子聡（えべすさとし）（50）の父が亡くなっていた。線香をあげるため、蛭子の自宅を訪ねた。蛭子は山本を花見に誘い、久しぶりに酒を酌み交わした。

「最初に語り合ったのも花見じゃったな」。山本が赴任したとき、花見に誘ったのも蛭子だった。

夕刻、来訪を聞きつけた島民たちが港に集まってきた。酔いが回った山本は握手を交わすと、泣き崩れた。そこから先の記憶はない。

14年6月、山本は下松市の障害者福祉施設に再就職した。

かつての教員仲間とは疎遠になった。自分はドン・キホーテだったのかもしれないと思うこともある。だがこう思う。

「自分もかつては、原発に無関心だったのです」

第10章 農家で食べていける

上関町・祝島の漁業、竹林民子（71）には、腹が立って忘れられない言葉がある。

2009年9月、原発工事用のブイの搬出を阻止するため、沖で漁船を綱でつなぎ、工事船の進入を阻止した。

そのとき、中国電力の社員が、船上から拡声機で呼びかけた。

「農業や漁業の第1次産業だけで、本当にこの島がよくなるとお考えですか」

「人口が減って、お年寄りばかりの町になっているんですよ」……

1982年に原発計画が浮上した当初、島内の原発推進派の町議らは「原発ができれば交付金が町に入る。あまり働かなくても楽に暮らせる」と説いた。

女性たちはそれに反発した。

それなら原発に頼らない島おこしをすればいいだろう。

女性たちは85年からビワ茶や水産加工品の商品開発を本格化させた。

ビワ茶には血糖値を抑える効果があり、人気が高い。それに祝島のビワは無農薬栽培だ。農家に葉の提供を呼びかけ、ビワ茶の製造を始めた。89年ごろから評判が高まり始め、全国各地の産直団体などに卸すようになった。

00年に島にUターンした山戸孝（やまとたかし）（37）は、ホームページ「祝島市場」で、ビワ茶やヒジキなどの特産品をネット販売している。「上関原発を建てさせない祝島島民の会」前代表の山戸貞夫（さだお）（64）の長男だ。

中高生時代は父親が煙たく、「社会問題を語るのはかつこ悪いとさえ思っていた」。大阪の大学を卒業した後、大阪で就職したが、将来性に不安を感じて退職し、島に帰った。

当初は島外で再就職先を探した。応募したのは、重機のリース会社だった。採用直前になって突然、書類の不備を指摘され、「今回はなかったことに」といわれた。父のことが知れた、と思った。

ひまをもてあましていた01年6月、荒れていたビワ畑の草刈りをした。実っていたビワを食べたら、思わぬ甘さが口の中に広がった。

「販路さえあれば、農家でも食っていけるかもしれない」と定住を決めた。

ネットでは通販の情報に加え、島の近況も載せている。今やほとんどの商品が固定客だけで完売する。

孝は05年に町内の女性と結婚し、3児をもうけた。今では「島民の会」の事務局次長を務めている。

上関町・祝島の狭い路地を、耕運機の走る音が響く。ハンドルを握るのは、島でブタを飼う氏本長一（うじもと ちょういち）（64）。ブタのエサ用に島民が出してくれる残飯を毎朝回収している。

島内8カ所に置いたバケツには、大根の葉、おから、スイカ、米ぬか……。多いときには約100キロになる。2014年6月には、傷もののビワが大量に入っていた。

回収地点に足を運べないお年寄りもいる。氏本はそんな島民の自宅も1軒ずつ訪ねる。

「おはよう。体調はどう？」

「あんたも頑張るね」

残飯を受け取り、「また来るからね」。氏本には、こんな安否確認を兼ねた訪問先が3～4軒ある。

氏本の農園は、海沿いの元耕作放棄地。電気柵で囲まれた広い畑にブタがいる。

氏本が近づくと、ブタたちは尻尾を振り、鼻を鳴らしながら近寄ってきた。ビワをばらまく。ブタたちは体をぶつ けながら食べ始めた。

「こらブルー、ケンカしないの！」

氏本は笑顔で叱る。ピワ以外の残飯は、高さ約1メートルのプラスチックの入れ物の中で混ぜ合わせて発酵させ、エサにする。入れ物は漁師からもらった古いいけすだ。

いま飼っているブタは、繁殖用の2頭と合わせて計7頭。いつもは約20頭いるのだが、出荷したばかりでだいぶ減った。

この島で養豚を始めて7年。これまで約70頭を出荷している。

ふつうの養豚だと約7カ月で出荷する。しかし氏本は、3倍の2年をかけて育てる。促成の大量生産型のブタより肉が締まり、味が濃くなるからだ。肉は、契約している東京・西麻布のフランス料理店などに、市場価格の約3倍で卸す。

自身の農地のほか、高齢化で耕せなくなった耕作放棄地を借り、そこにもブタを放している。広い畑で走り回り、ブタはのびのびと育つ。

氏本は島の出身者だ。隣町の高校を卒業後、北海道の帯広畜産大に進み、稚内市役所に就職。畜産関係の仕事をしてきた。肉牛が3千頭いる宗谷岬の牧場長まで務めた。

だが01年にBSE（牛海綿状脳症）が問題になる。大量生産型の畜産に限界を感じた。

07年、母の介護のため仕事をやめて帰郷し、耕作を放棄していた農地でブタを飼い始めた。

「飛び出したはずの祝島の農業のほうが将来性がある。そう気づいたんです」

第12章 責任があるんです

「祝島の未来に、私には責任があるんです」

ブタを飼う氏本長一（64）はそういった。氏本の亡き父、久市（くいち）は原発推進派だったからだ。

久市は島有数の農家で元上関町議。町農協の組合長も務めていた。

原発計画が浮上したころ、北海道にいた氏本は父にいった。

「原発なんか呼ばなくても、農業でやっていけるんじゃないか」

「それは島の外でやればええ」

父は素っ気なかった。以来、原発について議論した記憶はない。

氏本自身、島の農業に将来性を感じられず故郷を離れた。祝島は山地が多く平地が少ない。棚田や段々畑が大半で、大規模化は望めない。

「父は、上関の農業はもう先がないと思っていた。原発誘致はベストとはいえないが、仕方がないと考えていたようです」

祝島には4年に一度、千年以上の歴史を持つとされる祭り「神舞（かんまい）」がある。

祭りの起源は平安時代の886年とされる。大分県国東半島に帰る船が嵐で祝島の三浦湾に仮泊し、湾近くの3軒がもてなした。その返礼に五穀の種が島にもたらされ、祭りが始まったと伝えられる。

氏本家は、一行をもてなした「三浦三軒」の一つに数えられる。久市は祭りで氏子代表を務めていた。

原発計画が浮上した当時、町議や漁協組合長ら島の大半の有力者は推進派だった。島は二分される。

祭りは1984年、88年と2回続けて中止された。92年から復活したが、両派の溝は今も深い。

久市は2006年に老衰のため83歳で死去。氏本は翌年に帰郷した。

14年5月21日、氏本は初めて田植えをした。久市が98年に稲作をやめ、荒地になっていた田んぼ。ブタの放牧で農地として再生させた。

仲間8人が手伝いに来た。田は5段ある石垣の棚田の1枚で約8アール。9人が横一列に並んで植え始めた。

「おい、もうちょっとゆっくり行こうや」と笑い声が飛ぶ。

ブタが耕してくれたせいか、土は少しフンの香りがする。漁師の竹林民子（71）がバイクで駆けつけ、釜でみそ汁をつくった。

氏本が島に帰って7年がたつ。

「これでやっと、祝島の島人になる資格ができたかな」

氏本は15年、この田で酒米に挑戦するつもりだ。その米で、16年の神舞に向け、お神酒をつくろうと思っている。

2010年11月、上関町・祝島に食堂ができた。「こいわい食堂」。祝島のすぐ隣にある小祝（こいわい）島から取った。広島市から移り住んだ芳川太佳子（よしかわたかこ）（39）が養豚家の氏本長一（64）の自宅敷地内の離れで開業した。

メニューは1種類だけ。かまどで炊いた無農薬米に魚のあらを使ったみそ汁、ヒジキや自家製の漬物も付いて1人前千円。500円でタイの刺し身や放牧豚の料理も追加できる。ほとんどが祝島産だ。

芳川が島を初めて訪れたのは、10年2月のバレンタインデーだった。氏本の農場を見学した。

「これは未来の農業の姿だ、と感じました」

滞在中、島のおばちゃんが「おいこ」（背負い子）にまきを背負って山から下りてきた。それを見て、「まだこんな道具を使う暮らしが残っていたのか」と胸を打たれた。

芳川は帰宅後、氏本に手紙を書き、農場での実習を頼み込んだ。10年4月、3週間にわたって住み込みでブタの世話をした。

知らないおばちゃんが「一緒にアオサを採りに行くか」と誘ってくれた。港近くを歩くと、漁師はタイをくれた。島民はいいたいことをはっきりいう。「まるで外国にいるようだ」と思った。

そんなとき、バイクに乗った漁師の竹林民子（71）とすれ違った。毎日笑顔で島を歩く芳川に言った。

「あんた祝島がそんなに好きなら、ここに住みんさい」

民子の一言が背中を押した。

芳川は10年5月に出身地の広島から移住した。東京や広島、ドイツの飲食店で働いた経験がある。氏本から島の食材を使う食堂をやったらどうかといわれ、そう決めた。

芳川は移住した当時、島民に言われて驚いたことがある。

「スカートははくな」

そのころ、原発計画地の田ノ浦では抗議行動が続いていた。何かあればすぐに駆けつけるため、というのが理由だった。原発反対のおばちゃんたちは、もんぺをはいたまま寝て、枕元にはヤッケを置いていた。

食堂には、島の漁師やおばちゃんたちが食材を持って頻繁に出入りする。郷土料理の作り方、ヒジキの採り方、魚のさばき方を教わった。

「祝島を『高度成長に取り残された田舎』と捉える向きもある。でもそうじゃない。ここには豊かな暮らしが当たり前にあるのです」

第14章 昔は自民支持だった

東日本大震災3カ月後の2011年6月18日、芳川太佳子（39）が営む祝島の「こいawaii食堂」に、意外な客が来た。現首相・安倍晋三（あべしんぞう）の妻、昭恵（あきえ）（52）だ。環境エネルギー政策研究所長の飯田哲也（いいだてつなり）（55）といっしょだった。

昭恵は震災直後の11年春、講演会を機会に飯田と知り合い、付き合いが始まった。飯田が昭恵を誘った。

「安倍さんの地元の山口県で何が起きているか。一度見ておいたらどうでしょう」

飯田は原発反対派と連絡を取り、昭恵を連れて行くことを伝えた。

北九州空港からレンタカーでいっしょに向かった。祝島へ渡る乗船場に着く約30分前、飯田の携帯電話が鳴った。反対派の島民からだった。

「飯田さん、やばいよ。乗船をブロックされるかもしれない」

上関町の上関町原発推進派が、昭恵が船に乗るのを阻止するという情報が入っていた。3カ月後には町長選を控えていた。

飯田は乗船予定だった乗船場を通り過ぎ、別の乗船場に向かった。そこでは妨害はなかった。

昭恵は島に上陸すると、ブタの放牧場を訪ね、漁師の竹林民子（71）といっしょに写真に納まった。昭恵が驚きの表情を見せたのは、「みさき旅館」を訪ねたときだった。

安倍晋三の祖父、岸信介はA級戦犯容疑者だった。1948年12月に巣鴨プリズンから釈放。52年に公職追放が解けるまで、祝島ヘタイ釣りによく出かけていた。そのとき、みさき旅館に泊まったと聞いたのだ。

滞在した客室はそのまま残っていた。8畳の和室に8畳の応接間がついた「桜の間」だ。

向かいの公民館2階には「公心如日月」と書かれた岸の書が飾られていた。島民たちがいつも原発反対集会を開く公民館だ。

昭恵はビワの選果場も訪ねた。おばちゃんの一人は昭恵の手を握り、目に涙を浮かべた。

「来にくかったろうに、よう来ちゃった。私らは元々自民党支持だけど、30年もこんな目にあわされた。だから今は自民党大嫌いなんよ」

中選挙区時代、岸と弟の佐藤栄作は同じ山口2区だった。島では岸派と佐藤派に分かれて争った。原発計画が浮上するまでは、島は自民党の2派が中心だった。

昭恵は11年6月19日の自身のブログにこう書いた。〈また伺います。いつかきっと主人と一緒に...〉

2012年10月5日、山口県平生（ひらお）町のシーカヤックガイド、原康司（はらこうじ）（42）は、山口県柳井市の県柳井総合庁舎にいた。原は祝島支援の活動をしていて、そのときも10人ほどの仲間といっしょだった。

中国電力が山口県から取得した原発計画地・田ノ浦の埋め立て免許は10月7日午前0時で切れる。中国電は埋め立て工事は中断したものの、原発の建設はあきらめない姿勢を明らかにしていた。

原は、中国電の社員が免許延長の申請書類を、上関町を管内に持つ県柳井土木建築事務所に持ってくるつもりだった。前日の晩に申請を知り、急きょ仲間に声をかけた。中国電社員を見つけて申請を取り下げさせるつもりだった。

4階建て庁舎の入り口3カ所に立ち、入る人を一人ひとりチェックした。駐車場に入る車もすべて見て回った。非常口も見張った。

午後3時すぎだった。

「さっき申請したみたいです」

取材に来ていた記者が言った。

そんなはずはない。ずっと見ていた。入り口にも駐車場にも、社員とおぼしき姿は見えなかった。

急いで4階の土木建築事務所に上がり、職員に詰め寄った。

「本当に申請があったのか」

職員は原たちを別室に通し、申請を認めた。職員は「こちらとしては申請を拒否できない。粛々と受けるだけです」と説明した。

原は直後の報道を見て、さらに驚いた。服装が書いてあったのだ。

土木建築事務所に申請に来た中国電の社員2人は、原が予想した「黒っぽい背広にネクタイ」ではなかった。1人はTシャツ、もう1人は作業服。「混乱を避けるため」とのことだった。

また2人は、職員しか使わない非常階段を使って入った可能性が高いとも書かれていた。

原は05年から、シーカヤックで工事船の進入阻止などをしてきた。北米ベーリング海沿岸や南米アマゾン川の単独行の経験がある。祝島島民の昔ながらの暮らしに共感し、支援を続けてきた。

その中で原は、中国電が島民たちがいない未明に作業を強行したのを目撃した。島民に対し、拡声機で「1次産業だけではやっていけませんよ」などに見下した発言を繰り返しているのも聞いた。

「震災と原発事故を経ても、中国電力の体質は何も変わっていない」

第16章 知事に「うそつき！」

2013年3月4日、山口県議会の議場は怒号に包まれた。

山本繁太郎（やまもとしげたろう）知事（故人）が中国電力の原発計画地の埋め立て免許の延長申請について、こう述べたのだ。

「1年程度を期限に、更に補足説明を求めることにした」

埋め立て免許の延長を却下するのではなく、その判断を1年先送りする、という意味だった。

傍聴席にいた祝島の正本笑子（しょうもとえみこ）（78）は右手を挙げて立ち上がり、叫んだ。

「知事は選挙のとき、埋め立ては認めませんというたでしょうが！」

職員に制止されたが、正本は食い下がった。

「私はここでいうしか知事に伝えられないんです、生活のために来ているんです！」

ほかの島民や反対派の市民約50人からも怒号が飛んだ。

「うそつき！」「恥を知れ！」

議事は中断した。議長が傍聴席の数人の退席を求める。演台の山本は、めがねを取って汗をぬぐい、顔を紅潮させていた。

山本は12年7月の知事選で、上関原発建設の凍結を明言。同10月に中国電が免許の延長申請をした際も「不許可とする」といていた。

だが、12年12月に山口選出の安倍晋三首相による政権が誕生。その後に方針を急転換させた。

正本は22歳のときに島の漁師、英一（78）と結婚。英一の家は代々漁師だ。英一は島の中学を出てからずっと一本釣りの漁師で、遊漁船も営む。

若い頃は漁の傍ら、年間280日も遊漁の客を受けて働きづめだった。その働きで、3人の娘を大学や専門学校へ行かせた。

「この海と山さえあれば、私たちは生きていける」と正本はいう。

終戦直後、祝島は引き揚げ者であふれた。人口は約3千人にふくれあがったが、人々は助け合って暮らし、飢えた者はいなかった。

だが原発は事故がなくても温排水で海の環境を変えてしまう。事故が起きれば農漁業は壊滅する。正本は知事の先送り判断は、30年以上にわたる島民の思いを踏みにじっていると感じていた。

14年2月の知事選では、元総務官僚で自民、公明推薦の村岡嗣政（むらおかつぐまさ）（41）が当選した。選挙では、上関原発についてほとんど語らなかった。

その村岡は14年5月14日、「十分な材料がない」と、中国電の延長申請の判断をさらに1年先送りした。

上関原発計画地の海を、自然環境の面から守ろうとする人もいる。

上関の自然を守る会代表の高島美登里（たかしまみどり）（62）は、計画地の海を船で見て回る。国天然記念物の海鳥カンムリウミスズメを調査するためだ。

「あれ、カンムリじゃない？」

漁船のエンジン出力を落とし、警戒させないように近づく。高島は海上を見つめ続ける。体長20センチほどの大きさのカンムリウミスズメは、海上ではなかなか見つけにくい。

近づくのと、2羽が寄り添うように海面を泳いでいる。後方から漁船を近づけると、潜水を始めた。すぐに数十メートル先にまた姿を現す。時折、海面に体を起こし、ペンギンのように羽を震わせた。

カンムリウミスズメは、日本近海を中心に生息し、総個体数は約5千羽と推定される。環境省のレッドリストでは絶滅危惧2類。冠のような頭頂部の羽毛が特徴だ。高島たちは2008年5月、計画地の近海で初めて確認した。

守る会ができたのは1999年。中国電力が同年4月に提出した環境影響評価準備書がきっかけだった。

準備書を見た祝島の島民から「スナメリの記載がない」などと指摘の声が上がった。

環境アセスのやり直しを求め、全国から約12万人の署名が集まった。高島らが署名簿を旧通産省に持っていくと、担当者からこんな言葉を聞いた。「中国電力から出された準備書は、9電力中、最低のものだ」

高島は山口大の学生時代は国史専攻で、野生生物は素人だった。卒業後は山口県職員労働組合に勤めた。中国電の準備書を分野ごとにコピーし、研究者に送って評価を求めた。

来訪した研究者と田ノ浦周辺を調べ始めると、発見が相次いだ。希少種のナメクジウオ、国天然記念物のカラスバト……。絶滅が心配される生物が数多く確認された。

調査した京都大大学院教授の生態学者、加藤真（かとうまこと）（56）はいう。

「田ノ浦地区は世界自然遺産に値する場所だと考えます」

中国電は追加調査をした後、01年6月に環境影響評価書をつくり、経済産業省に提出した。経産省は翌7月に「適正」と判断し、環境についての評価は確定した。

10年1月、日本生態学会や日本鳥学会などは合同でシンポジウムを開き、環境影響調査のやり直しを求めた。学会が電力会社の調査にクレームをつけるのは異例だった。

第18章 町民の反応変化した

2014年8月17日、上関の自然を守る会は京都大の大講義室で、絶滅危惧種の海鳥カンムリウミスズメの国際シンポジウムを開いた。

国内外の研究者の発表に、約200人の聴衆が耳を傾けた。

イタリアの研究者は13年3月、上関原発の計画地近海で、カンムリウミスズメ3羽の腹部に卵を抱いた跡を見つけたと報告。「周辺に繁殖地がある可能性が高い」と指摘した。

北海道大名誉教授の向井宏（むかいひろし）（70）は語った。「1960年代以降、瀬戸内海の大部分で開発が進み、貴重な生物が消えてしまった。田ノ浦は奇跡的に残された希少種の宝庫だ」

会後の交流会では、研究者たちの輪の中心に「守る会」代表の高島美登里（たかしまみどり）（62）がいた。

15年間、高島を支えてきたのは、高島の案内で調査を続け、田ノ浦周辺の生態系を明らかにしてきた研究者たちだった。

彼らの拠点は、高島の自宅の離れの木造平屋「ひよりみ荘」だ。

なぜ日和見か。海での調査は天候次第という意味もあるが、原発に賛否の意見を持たない人にも、自然を守ろうと思ってもらいたいとの願いからだった。

高島は2009年、定年まで3年半を残して山口県職労の職員を退職し、県中部の防府市から上関町に転居した。中国電力が埋め立て工事を始めた。それを止めるため、今できることをしなければいけない。そのためには近くに住んでいたい――。

上関町の本土側は、祝島と違って原発推進が多数派だ。

転居したとき、町民から「よくこんな田舎町に来たね」といわれた。それを聞いて、電力会社が原発立地自治体の住民に植えてきたのは、故郷の否定だったと気づいた。

上関は不便で何も無い田舎町だ、だから原発をつくるしかない、という論理。高島は、その前提から覆したいと思う。

福島原発事故後、町の人の反応が変化すると高島は感じている。朝、ジョギングしていると、あいさつを返してくれる人が増えた。調査に行こうと長靴で歩いていると「ナントカスズメを見に行くんやろ」と声をかけてくれる人もいる。

原発反対を声高に訴えることはしていない。だが最近、反対派でない人からも「上関は自然を売りにするしかないのかもね」といわれた。

「祝島の人たちは、無理をせず粘り強く運動を続けてきた。そんな姿勢を見習っています」

2014年3月4日、上関町・祝島で久しぶりの「闘い」があった。

山口県漁協の役員が島を訪れ、中国電力からの漁業補償金10億8千万円を島の漁業者にどう配分するかを決めようとした。反対派の島民は当然、受け取りを拒否している。

港には「上関原発絶対反対」ののぼりが並び、おばちゃんたちはウインドブレーカーに長靴姿。定番の運動スタイルだ。その中には漁師の竹林民子（71）もいる。

午後4時40分、県漁協の役員が定期船を下りてきた。「上関原発を建てさせない祝島島民の会」代表の清水敏保（59）が立ちふさがった。

「帰って下さい」

推進派の漁師が「どかんか」と押しのけようとする。

島原発推進派は住民の約1割。反対派とはあいさつを交わさない人もいる。

反対派は数十人で取り囲み、進入を許さない。陸につながる通路は幅約2メートル。スーツ姿の柳井署の警察官が拡声機で双方に「危ないから下がりなさい!」と叫ぶ。両派のにらみ合いが続く。

午後5時5分。役員は何もできずに、乗ってきた定期船で帰った。

清水はうんざり顔だった。

「県漁協が来ると、島が二分するんだ。二度と来てほしくない」

中国電は00年4月、原発計画地周辺の8漁協と、原発の温排水による影響補償などとして総額約125億円を支払う契約を結んだ。だが祝島だけは受け取りを拒み、県漁協が預かったままになっている。祝島の補償金は漁師1人あたり平均約1700万円にのぼるという。

09年以降、祝島の漁師たちは受け取り拒否を続けてきた。だが、13年2月末、一転して31対21で受け取りを決めた。

祝島の漁協支店は魚価の低迷や水揚げの減少で赤字続きだ。島の漁師たちは毎年、赤字の穴埋めを求められる。12年は1人あたり8万6千円。13年は13万5千円、14年は17万8千円……。受け取りを決めた裏には、そんな事情がある。

しかし受け取りを拒否している漁師は多い。竹林民子もその1人だ。

14年7月21日の海の日。祝島のドキュメンタリー映画を撮った瀬瀬（はなぶさ）あや（39）らが島を訪れ、約2010万円のカンパを届けた。全国の2363人の賛同者からの寄付だ。

瀬瀬は「祝島のために何かしたいと思っている人はたくさんいるのです」と伝えた。

2014年8月15日、祝島で盆踊りがあった。

毎週月曜の原発反対デモで島民が集まる広場に、高さ約5メートルのやぐらが組み立てられた。やぐらの四隅には「反原発商工会」と書かれた赤ちょうちんが揺れた。

午後9時、フラダンスが始まった。

食堂を営む芳川太佳子（39）が髪に花飾りをつけ、島の女性3人とチームをつくって踊る。すると、頭に木の葉を載せた1人が加わり、中央に出てきた。フラダンス用のスカートをはいている。

漁師の竹林民子（71）だ。

民子はすました顔のまま、隣の踊り手のまねをして踊る。もちろん練習などしていない。見物のおばちゃんたちは手をたたいて笑い転げた。

バンドの若者が民子の様子に合わせて、おどけた調子で炭坑節をひきはじめた。民子はスカートの裾を翻しながら踊った。島民たちが手拍子をとった。

盆踊りが始まる。見物の帰省客や島民たち約50人が加わった。踊りの輪は二重になり、肩が触れあうほどだ。民子の飛び入り参加で、一気に気分が乗ったようだ。

祝島の島民は8月現在、445人。うち65歳以上が75%にのぼる。お盆の時期、人口は帰省客で倍以上に膨れあがる。本土側の船着き場の駐車場には「広島」「京都」など県外ナンバーの車が100台以上並ぶ。島を出た子どもたちが帰省するのは盆と正月ぐらいなのだ。

しかし原発の問題が起きてから、島には移住者が入り始めた。その数は約30人。14年だけでも、移住者が中華料理店とカフェを始めた。

東日本大震災後、田ノ浦の埋め立て工事は止まった。上関原発の計画は宙に浮いたままだ。その間に、島の高齢化と人口減少がじわじわと進んでいる。32年前から反対運動を続ける人も、減り続けている。

上関原発を建てさせない祝島島民の会代表の清水敏保（59）はいう。

「反対運動の中心を担う女性たちも、もう70～80代になっている。一日も早く、ぜひ白紙撤回を決めてほしい。推進派も反対派もない町づくりを、ゼロから進めたい」

民子は笑う。

「また工事が始まれば、今すぐにでも行く。何度でも、はってでも行く」

プロメテウスの罠〔53〕 抵抗32年の島「反原発、ゆったり闘うんよ」

著 者 朝日新聞（小川裕介）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2014年10月16日 WEB新書版発行

2015年12月31日 EPUB版発行

©2015 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86612-562-6

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2014年10月16日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。